論叢現代語・現代文化　2010 Vol. 4 pp. 157 － 181

思想教育と文学の政治学
—GHQ/SCAPの日本民主化政策と アメリカ西部フロンティア言説の関係性—

鈴木　紀子

はじめに

第二次世界大戦後、連合国軍最高司令官総司令部（General Headquarters, Supreme Commander for the Allied Powers）（以下GHQ/SCAP）が行った日本民主化政策は多岐に渡る。教育基本法制定による教育制度改革、労働組合の結成奨励、財閥解体、女性参政権付与など、政策は広範囲に及ぶ。その中でも、GHQ/SCAPが民主化教育材料に外国文学を利用した事実は、思想教育と文学の政治学を考える上で極めて興味深い。GHQ/SCAPは自ら行った厳密な検閲体制の下、外国文学、とりわけアメリカ文学作品の翻訳･出版を推進し、一般大衆のアメリカ文学の読書奨励を積極的に行った。その目的は、アメリカの文学を通して、占領下日本にアメリカが理想とする民主主義理念を啓蒙する為であったとされている。

アメリカ文学作品と、民主主義理念の移植はどのように結び付いたのだろうか。[1] この問題を考える上で注目に値するのは、GHQ/SCAPが選奨したアメリカ文学の作品群を、一九世紀西部開拓時代の西部フロンティア、または開拓生活を描いた作品—ここでは「西部文学」と呼ぶ—が特徴的に占めていたという、あまり知られていない事実である。それはGHQ/SCAP選抜作品だけでなく、GHQ/SCAPの要請により本国から派遣されたアメリカ教育使節団が日本に「本の贈り物（Gift of Books）」として送った六百二十冊の図書の選別にも言える。[2] また図書のみならず、民主化教育材料として広く日本に紹介されたアメリカ国務省製作のアメリカ映画作品の中にも、特徴的に西部フロンティアを題材とした作品が含まれていた。

本論文は、これまで注目されてこなかった占領政策と西部フロンティア言説、翻訳図書の関係を浮き彫りにし、西部文学が表象する西部言説がGHQ/SCAPの民主主義理念移植の媒体として利用された事実を明らかにする。しかし、それは日本側が受動的にアメリカの理念を受容したことを意味しない。日本人独自の文化的視野は、本論文が明らかにするように、西部フロンティアを憧憬と羨望の対象としての理想的空間と言うよりも、日本人の共感を呼び起こす空間へと意味変容、土着化させていく。この事実を通して、日米間の民主主義の移植と受容の齟齬を明らかにしつつ、GHQ/SCAP戦後日本民主化の「成功」を疑問に付し、占領政策における思想教育と文学の政治学の複雑性を考察する。

GHQ/SCAP 日本民主化政策

1945年8月の終戦と同時に始動するGHQ/SCAPの日本占領政策は、日本の脱軍国主義・脱超国家主義と同時に、民主主義国家への社会改革が柱であった。日本の民主主義国家への改革再建にあたり、占領軍は図書や教科書・雑誌・映画・ラジオなどメディアを媒体とした社会改革政策を打出した。特に、GHQ/SCAPは図書を最も効果的な民主化教育手段と位置付けていた。GHQ/SCAPは、アメリカの図書館システムに沿って国立国会図書館の設立、学校図書館・公立図書館の整備を促進させ、日本での効率的なアメリカの出版物普及拡大を図った。また、GHQ/SCAPは終戦から僅か三ヶ月後から全国主要都市にCIE図書館（Civil Information and Education Section—情報・教育・宗教などの文化的・社会的問題を扱ったGHQ/SCAPの一機関）創設に着手、「精選されたアメリカの出版物コレクション」を各図書館に所蔵し、アメリカの生活文化を一般大衆に広く紹介した。[3]

更に1946年11月、GHQ/SCAPは「占領目的を更に促進する」[4]策として、著作権付き外国図書の日本語翻訳・出版のための入札制度を導入する。アメリカの出版物を速やかに日本語に翻訳・出版することで、一般大衆への普及促進を図ったのである。[5] 1948年5月、CIEにより計百冊の選抜英米図書に翻訳権が与えられ、翌6月に第一回入札が行われた。この入札制度は、1951年11月に終了するまで全十四回に渡り競争入札を行い、総計四百七十四冊の外国本が日本の出版社により落札された。このCIE翻訳許可外国図書は日本の出版界の非常に高い関心を集め、毎回入札時には数多くの出版社が詰め掛け、相当な高値で落札する出版社も少なくなかった。[6]また一般大衆も高い関心を持って翻訳外国図書を受入れた。[7]

この入札制度でCIEにより翻訳権を与えられた外国図書の多くはアメリカの図書であった。[8]入札に出されたアメリカの図書は全てCIEにより選抜された図書であり、選抜過程には日本側の意向は一切反映されなかった。CIEによると、翻訳権を与えられた外国本は、必ずしも文学的価値の高い「いわゆる『最良本（best books)』を集めたものではなく」、占領下日本が「ポツダム宣言で宣言した義務の遂行に貢献し得るものを基準に選ばれた」図書であった。[9]つまり、明らかにCIE翻訳許可外国図書は、日本占領政策遂行にあたり有効な手段として用いられたのである。

この日本再建に「貢献し得る」選抜図書の一部を、西部開拓期を題材とした西部文学が占めていたことは注目に値する。先述のように、アメリカ教育使節団が日本に送った「本の贈り物」の中にも相当数の西部文学が含まれていた。その内訳の一例を挙げると、Laura Ingalls Wilder 作*Little House in the Big Woods*、*Little Town on the Prairie*、*Farmer Boy*、*These Happy Golden Years* を始め、Willa Cather 作*My Ántonia*、*O Pioneers!*、Carrol R. Brink 作*Caddie Woodlawn*、Stephan W. Meader 作*Jonathan Goes West*、Margaret Sutton 作*Jemina, Daughter of Daniel Boone*、Rose

Wilder Lane 作*Let the Hurricane Roar*、Esther Averill 作*Daniel Boone*、Jeanette Eaton 作*Narcissa Whiteman : Pioneer of Oregon*、John Flanagan 作*America is West*、Marjorie K. Rawlings 作*The Yearling* などである。CIE の翻訳許可図書に関しても、Wilder 作*Little House on the Prairie*、*Little House in the Big Woods*、*The Long Winter*、Cather 作*O Pioneers!*、Brink 作*Caddie Woodlawn*、Rawlings 作*The Yearling* などの西部文学が含まれていた。また、翻訳許可図書以外にも、アメリカ国務省国際映画部（International Motion Pictures Division）が製作しGHQ/SCAP が日本全国各地に普及させた民主化教育用映画の多くもまた、西部フロンティアや西部開拓者を題材とした内容の物であった。これらの事実を概観してみても、GHQ/SCAP の日本民主化政策には確かに西部文学及びフロンティアが何らかの関係性を持っていたことが分かる。

アメリカ西部と民主主義

GHQ/SCAP 日本民主化政策と「西部」はどのように結び付いたのか。GHQ/SCAP は、西部文学に描かれた西部フロンティアに、アメリカ民主主義の源泉を見出した。連合国最高司令官ダグラス・マッカーサーは、ワイルダーの西部開拓物語について、「ワイルダーの『小さな家』シリーズはアメリカの民主主義的生活の理念を実に生き生きと伝えている」と考えていた（Missouri Secretary of State 17）。彼は自ら「小さな家」シリーズの日本での翻訳・出版、学校教材としての利用普及を薦めている。この背景には、「小さな家」シリーズの熱烈な愛読者であったマッカーサーの妻、ジーン・マッカーサーの夫への強い推薦があったと言われている。[10]

同様にアメリカ教育使節団もまた、西部開拓物語を「米国の生活を完全に思い描くことができる本」（中村・三浦 55）と認識していた。[11] 同じことは国務省にも当てはまる。国務省国際映画部が日本民主化教育用に製作した映画は、西部フロンティアを題材としたものを多く含んでいた。同映画部は、映画を用いた日本教育政策の目的は、映画を通してアメリカという国を世界に向けて説明し、民主主義を普及させることとしていた。そしてその説明の中で、国務省が特に「世界中の人々に理解」させようとしたのは、「アメリカとその国民の特徴」であり、とりわけ「開拓者精神」が「アメリカ人の特徴として非常に大きな影響」を与えたことであった。国務省は、「アメリカの若々しさ、理想主義、楽観主義、伝統よりも新しさを重んじる傾向は、より良い生活を打ち立てようとした開拓者の歴史から始まった」と強調した（谷川 178）。[12] このように、マッカーサーを始め多くの占領関係者が、西部フロンティアとアメリカの民主主義を強く結び付けていたのだ。

GHQ/SCAP や教育使節団、及び国務省国際映画部が西部に民主主義の原点を見出した背景には、フレデリック・ジャクソン・ターナーのフロンティア理論

の影響があると考えられる。ターナーは1893年に論文“The Significance of the Frontier in American History”の中で西部フロンティア理論を提唱した。ターナーは、その歴史上画期的な論文の中で初めて、西部フロンティアと「アメリカらしさ(Amreicanness)」、そして民主主義の関連性を学問的に体系づけた。ターナーによれば、フロンティアがアメリカに与えた最も重要な効果とはアメリカに民主主義を発達させたことであった。未開の地フロンティアの「原始的」な生活は開拓民に独立精神と個人主義思想を育み、それが次第にアメリカ人の国民的性質となり、その国民的性質が民主主義を発達させたというものであった。その中でフロンティア・ラインの西方への前進はアメリカ文明の前進・拡張と同時に、ヨーロッパから独立した真の「アメリカ」なるものを生み出したと考えられた。このターナーのフロンティア理論は、歴史家のみならず、政治・文学界など幅広い領域に甚大なる影響を与え、アメリカのナショナル・アイデンティティ形成に非常に重要な役割を果たした。[13]

GHQ/SCAPと教育使節団が選奨した西部文学は、彼らが理想とした西部像を描き出している。その理想的「西部」とは、自由・独立を求め、人間と自然大地との一体化を重んじる開拓者精神を持った者だけが成功し、そしてその成功した開拓者たちが「アメリカ」という確固たるナショナル・アイデンティティを形成する概念的空間である。更にこの「西部」は、女性や移民を含むジェンダーと人種の共存可能な西部像、いわば民主的な西部像である。選抜された西部文学は、このGHQ/SCAP・教育使節団の理想的西部像を明確に表す。CIE翻訳許可図書と教育使節団に選抜された七作品—ワイルダー作*The Long Winter*『長い冬』(1943)、*Little House on the Prairie*『大草原の小さな家』(1935)、*The Little House in the Big Woods*『大きな森の小さなお家』(1932)、キャザー作*O Pioneers!*『おお、開拓者よ!』(1913)、*My Ántonia*『私のアントニーア』(1918)、ローリングス作*The Yearling*『仔鹿物語』(1938)、ブリンク作*Caddie Woodlawn*『風の子キャディ』(1935)を例に挙げて考察してみたい。

ローラ・インガルス・ワイルダー(1867-1957)の「小さな家」シリーズは、初版発行以来アメリカ国内外を問わず現在まで翻訳出版を重ねるアメリカの代表的児童文学作品で、西部パイオニア物語の代表格的地位を持つ作品である。日本では1949年にシリーズ第六巻に当たる『長い冬』が初めて翻訳出版された。この作品は、入札の際出版社の間で「最も人気を集めた本(the most sought after)」の一冊となった。[14]次いで1950年に第一巻の『大きな森の小さなお家』(柴田徹士訳)と、第二巻の『大草原の小さな家』(古川原訳)(初版本の題名は『草原の小さな家—少女とアメリカ・インディアン』)が出版されている。

これらの物語は、作者ワイルダーが1870年代から80年代にかけて実際に暮らした中西部フロンティア各地における少女時代の記憶を基に、開拓生活を細やかに活き活きと描き出した物語である。『大きな森の小さなお家』は、ウィスコンシン州の深い

森に囲まれた未開拓地で生活するインガルス一家と主人公の少女ローラの日常の生活を描いている。全て手作業のソーセージ作りやメープル・シロップ作りなど、ローラが初めて見たり経験したりするフロンティアでの日々の出来事が、少女の眼を通して新鮮に描き出される。『大草原の小さな家』は、現オクラホマ州のインディアン・テリトリーに移住したローラたち一家が、開拓者のほとんどいない大草原で一から生活を立ち上げていく物語である。ここでローラは初めてインディアンに出会い、白人とインディアンとの衝突と軋轢を経験する。『長い冬』では、十四歳に成長したローラと家族が、ダコタ・テリトリー（現サウス・ダコタ州）の新しく生まれたばかりの小さな町で新生活を始める。そこでアメリカ史上類のない「長い冬」―半年間の厳寒と猛吹雪の厳冬―に直面する。吹雪で汽車が不通になり、孤立した町は物資不足と飢えの危機に陥る。この作品では、ローラたち開拓者家族の生きるための絶え間ない努力、工夫、忍耐の日々が切々と描かれる。これらワイルダーの西部開拓物語はいずれもフィクションではあるが、作者の実体験に基づいた大自然と開拓生活の様子が非常に詳細でリアルに描かれているために、作品全体がアメリカ西部開拓時代の壮大な歴史絵巻のようになっている。

ウィラ・キャザー（1873-1947）作『おお、開拓者よ!』、『私のアントニーア』は、それぞれ1950年と1951年に日本で翻訳出版された。前者は1948年の第四回入札に、後者は翌年第六回入札に出された。アメリカ教育使節団は、キャザーのこの代表的二作品を「アメリカの生活と歴史を反映した図書（Books Reflecting American Life and History）」に分類化している（中村・三浦 71）。中西部ネブラスカ州の開拓者達を描いた当二作品は、アメリカ文学で代表的な西部文学である。『おお、開拓者よ!』は、開拓地の人々の多くが苛酷で厳しい生活を強いる大地に絶望する中、主人公の女性アレグザンドラは土地への深い信頼と愛情を失わずに土地を耕し続け、最後には大地の豊かな恵みを得て成功を収める物語である。アレグザンドラは、家族の男たちの土地への無理解と支配欲とは反対に、自然の持つ潜在的力に絶対の信頼を寄せ続ける。最後に大地から実りを引き出し開拓地を肥沃な土壌に生まれ変わらせる彼女の姿は、成功した開拓者の姿であり、人間と自然の一体化を象徴している。

『私のアントニーア』は、ボヘミア移民の娘アントニーアが、異国アメリカの西部フロンティアで、父親の死や貧困といった厳しい現実に直面しながらも、労働と忍耐をもって、最後には豊かで幸福な家庭を築きあげる物語である。『おお、開拓者よ!』同様、移住して来たアントニーアと彼女の家族を待ち受けるネブラスカの大地は、初めから肥沃と豊穣の地ではない。彼らに成功と幸福をもたらすのは、主人公の不断の努力と自然との深い繋がりである。この物語の語り手でありアントニーアの親友であるジムが、開拓地を離れた都会での生活に満足や幸福を見出せない姿とは対照的に、西部の大地に根付き逞しく生きるアントニーアの姿は、まさにアメリカン・ドリーム

を象徴していると言える。

1939年ピューリッツァー賞受賞作品のマージョリー・K・ローリングス（1896-1953）作『仔鹿物語』は、戦前1939年に翻訳され、1949年4月の第七回入札に出された後、1951年に再度翻訳出版された。[15] キャザーの『おお、開拓者よ!』・『私のアントニーア』同様、この作品は1946年アメリカ教育使節団により、「アメリカの生活と歴史を反映」する作品のカテゴリーに入れられている（中村・三浦71）。また『仔鹿物語』は、アメリカ大使館が「良識的で（日米間の）文化交流上貢献し得る」「アメリカ文学史上、高尚な作品」を入れることを条件に経済的援助を行った、『現代アメリカ文学全集』（1957）にも選抜されている（佐藤202）。またこの作品は1946年にアメリカで映画となり、日本では1949年6月に公開されると、戦後のアメリカ映画ブームの中大きな話題を呼んだ。この作品は、1870年から1871年の南部フロリダ州を舞台としている。南部が物語の舞台設定ではあるが、1870年代当時未だフロンティアと呼ばれた開拓地における開拓民一家の物語である。主人公の少年ジョディーは、大自然の象徴である野生の小鹿に深く心を寄せ、家族・親友として共に生きようとするが、自然界に生まれ育った小鹿は人間の期待するようには振舞えない。一家が生きる糧とする農作物を悪戯に食い荒らす小鹿は、次第にジョディーたち一家の生活を脅かす存在となる。家族が生き残るため、ジョディーの父は彼に小鹿を殺すことを命じる。愛する小鹿との辛い別れを経験したジョディーは、人間が自然の中に生きることの厳しさを学び一歩大人へと成長していく。この作品では、ジョディーの父親ペニーの存在が大きい。自然と動物に深い知識を持ち頭脳明晰で力強いペニーは、息子にとって良い父親であると同時に優れた開拓者である。彼を心から理解し成長する息子の姿は、父の優れた開拓者性質の存続と発展を思わせる。

キャロル・R・ブリンク作『風の子キャディ』（1950）は、1936年のニューベリー賞受賞作品である。この作品は、1949年2月の第五回入札時に落札された。この物語は、作者ブリンクの祖母で開拓者であったキャディ・ウッドハウス（Caddie Woodhouse）の1860年代開拓地での思い出話を基に書かれた物語である。ウィスコンシン州の自然のようにおおらかで活発な主人公の少女キャディが、開拓地の自然や周辺に住むネイティヴ・アメリカンの人々に深い愛情を寄せながら、様々な経験を通して成長していく物語である。この物語では、元々イギリスの貴族出身でアメリカに渡ってきたキャディの父親に、彼のイギリスの親族の死による称号継承権が巡ってくる。しかし称号を継承するには、アメリカ国籍を放棄しイギリスに永住することが条件であった。家族それぞれが熟考の末、一家はアメリカでの自由な生活を求め、イギリスでの称号継承権を放棄しアメリカに残ることを決意する。約束された社会的地位よりもアメリカの西部開拓地に「自由」を見出したキャディは、自由・独立の精神を重んじるパイオニアのイメージを体現する。

これら七作品が紡ぎ出す「西部」とは、自由と独立の「約束の地（Promised Land)」神話に基づいた、夢の地としての西部像である。「約束の地」とは、十九世紀西部開拓運動期より続く、西部フロンティアを自由・独立・成功・可能性の象徴、「乳と蜜流れる約束の地」とする西部神話である。文明的開発の遅れた苛酷な自然環境にありながら、開拓者たちは自給自足の理想を高く掲げた人々である。「小さな家」シリーズと『風の子キャディ』、『仔鹿物語』は、物語の時代設定が1860年代から80年代と、西部開拓運動中期に当たり、開拓地の未開発度は高く、開拓者の孤立度・独立度も高い。そのような外界から隔絶された環境にあり、開拓者たちは皆それぞれ自立・独立した生活を追求する核家族である。どの開拓者一家も、農業や酪農により生活を営み、食料を家庭内生産している。生活レベルの差異はあるが、どの開拓者家族も生活に自由と幸福を感じ、比較的成功した開拓生活を送っている。そして彼らは、キャザーの二作品を除き、それぞれの未開地に自らの意思で移住してきた開拓者である。例えば、「小さな家」シリーズのインガルス一家の西部への旅は、父親の西部に対する強烈な憧れと共に始まる。

> とうちゃんはもう大森林には人が多すぎるといいました。…けものたちはあまり人の多い土地にはいなくなるでしょう。とうちゃんもそこにいるのはいやになりました。とうちゃんはけものたちがこわがらないで住む土地が好きでした。…
> ながい冬じゅう、毎晩とうちゃんはかあちゃんに西部のことを話しました。西部では土地がたいらで木がありません。草が密に、たけ高くはえています。けものたちははてしの見えないほどひろがっている牧場のなかにいるように餌をもとめてあるきまわっていて、人間はいません（3-4)。[16]

ローラの父にとって「西部」は、人間も動物も何者にも干渉されない自由の地であった。『風の子キャディ』においても、キャディの父がウィスコンシンの未開地に移住してきたのは、イギリスの封建的社会から逃れ、アメリカで自由で独立した生活を築くためであった。そして『仔鹿物語』も同様に、便利な町を敢えて離れ森の奥地へと入植したジョディーの父が求めたものとは、他人に干渉されない自由であった。

しかし、それぞれの西部フロンティアは、どれも初めから豊穣と成功の「約束の地」ではない。むしろ困難と危険の繰返しである。重労働しなければならない大地があり、開拓者たちの苦労を無にする厳しい自然の気候や野生動物がいる。文明の利器から隔絶された開拓地では、開拓者たちは全て無から生み出さなければならない。西部に絶望し土地を去る者も多い。しかしながら、どの作品の主人公にも共通しているのは、彼らが皆未開の地での生活に対する深い知恵と創意工夫、努力、そして大地への揺るがぬ愛情と信念を持ち、フロンティアの大地に自由と成功の夢を見ている点である。

その共通した精神が、どの作品においても、最後に彼らに望まれた成果と幸福をもたらしている。つまり、考察する西部文学が描き出す「西部」とは、西部を自由と独立の象徴的空間とする伝統的西部言説に基づきながら、しかし同時に、開拓地の過酷な現実を含む、より現実的で多面的イメージの西部である。

この西部では、自由・独立を求め困難に屈しない強靭な開拓者精神が開拓者の成功の鍵である。各作品の「西部」では、この開拓者精神を保持する者だけが最後に大地の恵みを受け成功への道を歩む。一方この精神を欠いた者は（例えばアレグザンドラの弟たちのように）、土地への信念を喪失し、西部の地に幻滅、生活に絶望する。この意味で、考察する七作品は、伝統的西部言説の枠組みに沿った開拓者像を描き出していると言って良い。しかしながら、注目すべきは、『仔鹿物語』以外これら作品の主人公たちが全員女性であるという点である。本来、西部フロンティアを「約束の地」とする西部神話は男性中心的言説である。この言説は、西部開拓運動をアメリカの文明の発達過程として正当化し、開拓者、とりわけ男性開拓者を、「原始的」生活に勇敢に立ち向かい「野蛮」な荒野に文明をもたらす愛国者として英雄化してきた。一方、女性は男性に対し二次的で主体性を持たない周辺的存在と見なされてきた。この男性中心的西部言説において、自由・独立の開拓者精神とは本来男性性に属するものとされ、女性には適用されない概念である。だが考察する西部文学作品に登場する女性開拓者たちは、明らかにその「男性的」要素を備えており、アレグザンドラやアントニーアのように登場する男性開拓者よりもその要素が強い場合すらある。これは作者が皆女性であることと彼女たちのフェミニスト的視点を反映していると推測されるが、これらの作品が表象する開拓者像と開拓者精神は、男性性にジェンダー化された西部言説を、内部に「女性」を取り込むことによって複層化させ、いわばより民主的なフロンティア像を現出させていると言える。[17]

これに加え、各作品が描き出す開拓者精神とは、アメリカのナショナル・アイデンティティ形成に関わる人間と自然大地との一体化を重んじる精神でもある。伝統的西部言説において、西部開拓者・土地・農耕の繋がりは重要な要素である。西部概念において、開拓民たちのフロンティアの大地における開拓作業は、単なる労働以上の意味を持っている。十九世紀の西部開拓運動は、白人アメリカ人にとってアメリカの国土拡張と同時にアメリカ文明・文化・思想の拡張と普遍化を意味していた。ターナーの提唱した前進するフロンティア・ラインは、単に開拓による環境の物理的変化を意味するのではなく、国と国民の「アメリカ化」のプロセスであった。開拓民のフロンティアにおける土地の開拓と農地化は、単なる開拓者個人の生活基盤形成ではなく、国家の基盤形成という意味を付与され、開拓者は国家基盤の創設者（founder）となり愛国的英雄として言説化されたのである。そして、アメリカの民主主義は彼ら開拓者たちの未開地を農地化する開拓過程から生まれたと考えられたのだ。この西部開拓運動

と農本主義の結びつきは、ジェファソン大統領期まで時代を遡るアメリカのナショナル・アイデンティティ形成過程の本質的構成要素であった。

西部とナショナル・アイデンティティの関連性を考える時、上記七作品は全て西部、延いては国家の物理的・精神的「アメリカ化」の成功的過程を描き出している。キャザー研究者Mary Paniccia Cardenは、『おお、開拓者よ!』及び『私のアントニーア』について、アレグザンドラとアントニーアのフロンティアの自然と大地への理解と愛、信念は、すなわち「アメリカ」に対する理解の基礎であると主張している（281）。つまり、彼女たちの大地との密接な繋がりと交わりは、西部で概念上生まれた「アメリカ」という土地空間の定着と安定化を象徴し、更に換言すれば、彼女たちのように土地に根付き成功を収めるパイオニアの姿は、輝かしいアメリカ国家建設（nation-building）の過程を体現する。同時に、彼女たちの開拓者精神のあり方はアメリカのナショナル・アイデンティティ形成の基盤となるべき思想を提示してみせるのである。

『風の子キャディ』はこのことを明確に表している。キャディの父ジョニー・ウッドローンは、先述したように、イギリス貴族の家系であるが、イギリスの家柄や階級を重んじる封建的慣習のために不幸を背負い、アメリカに渡った。だが彼のイギリスの伯父が死亡したことにより、アメリカにいる彼の所に称号継承の権利が与えられるチャンスが巡ってくる。しかし、家族全員の投票による決議により、一家はイギリスで約束された裕福な生活と貴族の地位よりもアメリカ人として生きることを選択する。その理由は、家族が、とりわけ父とキャディが、強くアメリカを自由で民主的な国家と誇りに思っており、アメリカの国籍を喪失することはすなわち自己の自由の喪失を意味するかに思えたからである。キャディは、人生の大きな選択に始めは迷いを見せる。しかしながら、アメリカとイギリスの二者択一を考える間に、キャディは自分が「アメリカ人」であることを強く認識し始め、自己のアメリカ人としてのアイデンティティを確固たるものにしていく。一方彼女にとってイギリスは、身分や慣習を重んじるあまり父の個人的尊厳を奪った嫌悪すべき国となる。Michelle Ann Abateは、キャディたち一家のこの選択は、一種アメリカ独立戦争の再演であるとしている（151）。キャディの決断は、独立戦争のレトリックである、ヨーロッパの旧体制から決別し自由と独立を求め戦うアメリカ兵の英雄的イメージを彷彿させ、物語の最後に誇らしげに「西」を向いて立つキャディの姿は、まさに独立戦争に勝利したアメリカとパイオニア・ヒーローのイメージを体現する。作品は次のように物語を結ぶ—彼女は「西をむいている、なぜなら、キャディは、西部のむすめで、アメリカ人だったから—」（262）。ここにキャディの「アメリカ化」は完結し、彼女のいる西部フロンティアは、民主主義的アメリカの原点となる。

更に、この西部開拓地で形成されるアメリカのナショナル・アイデンティティは、人間と自然の一体化を重んじる開拓者精神を保有することによって、アメリカ人以

外の人間も共有し得る。『私のアントニーア』において、ボヘミア移民のアントニーアは、アメリカの地に根を下ろし、多くの子供を生み、最後には成功した開拓者となる。Cardenは、アントニーアは西部フロンティアで成功することにより、移民文化とアメリカの伝統を自らの中に混合する新しいアメリカ人、"American dynamic hybridity"を創造すると述べる（294）。異文化の背景を保持しながらも、開拓者精神というアメリカの基本的精神を共有するアントニーアは、アメリカの西部大草原でアメリカン・ドリームを成し遂げ、西部開拓の伝統的歴史の一部となった姿を象徴して見せる。つまり、これまでの分析が示すように、GHQ/SCAP及び教育使節団が理想とした「西部」とは、「男性的」要素を持った「ヒロイック」な女性開拓者たちの姿、そしてアメリカン・ドリームを成就させアメリカの大地の一部となる移民の存在を持つ、伝統的西部概念のジェンダーと人種の枠組みを拡大させる、いわば新たな西部像、より民主的な西部像である。

マッカーサー、GHQ/SCAP、そして教育使節団が西部文学に読み取った、理想的民主主義国家アメリカの姿とは、まさに上記に述べた西部像を指すと言って良い。しかしながら、ここで注意すべきは、西部フロンティアに人間の自由・独立を見出し、西部開拓をアメリカ文明発展のための「明白なる天明」とした西部言説は、現実には明白な国家主義、帝国主義、また西欧人種に色濃く人種化された白人至上主義的イデオロギーに他ならない事実である。GHQ/SCAP民主化政策は、あくまで西部言説の内包するこれらのイデオロギーを根底に持つ他国植民地化行為であった。だが、この西部言説の国家主義的・帝国主義的側面は、西部文学が賛美する「約束の地」の西部神話の表層に隠され、占領軍は抑圧的植民地主義者ではなく、マッカーサーの言葉を借りれば、「遅れた」[18]日本に民主主義という「文明」をもたらすパイオニア・ヒーローとして現出した。事実、日本の占領政策に関するマッカーサーの発言には、西部フロンティアのレトリックが頻出する。例えば、1951年、彼は、日本はアメリカの指導下「自らのフロンティア」において「前進（forward progress）」していると表現し、日本の民主主義化をターナー理論におけるフロンティア・ラインのイメージと重ね合わせた（Wittener 47）。1880年代幼少時代をアーカンソー州で過ごし、自らを西部の男（frontiersman）と認識していた彼にとって、彼が行った極東アジアの民主化政策は、まさに「未開の荒野」を開拓し「遅れた人々（backward peoples）」に「文明化」をもたらす白人アメリカ人の西部開拓のイメージと重複するものだったのだ。[19]

戦後日本人と西部―「共感」する空間としてのフロンティア

GHQ/SCAPが効果的民主化教材とした西部文学を、日本人読者は熱心に受け入れた。だがそれは彼らがGHQ/SCAPの意図した西部を受動的、無批判に受容したからではない。むしろ日本人読者が、アメリカ西部フロンティアの開拓生活を日本人の戦

争体験と重ね合わせ、開拓者たちに共感を抱き、フロンティアの物語を「自らの物語」と読み変えるという受容を行ったからである。

戦後日本の外国文学への関心は非常に高かった。戦後日本はまさに翻訳外国文学の黄金期であった。1950年にはベスト・セラーとなった小説の半数以上をアメリカの作品が占めた程である。[20]急速にアメリカ化する占領下日本では、アメリカの文化が日本国民にとって最大の関心事であった。その関心の高さを示す例として、CIEが全国二十二箇所に創設したCIE図書館は、連日押し掛けた人々で超満員の状態であった。CIE図書館は、東京日比谷館が「一日千人の大入り」となり、1949年のひと月に全国の入館者数十三万人を記録する程の人気であった。[21]

この外国文学ブームの中、選抜西部文学は日本人読者の間に大変な人気となった。とりわけワイルダーの「小さな家」シリーズの翻訳第一作目として出版された『長い冬』は、1949年2月の発売直後から大変な好評を博し、占領期「最も読まれた翻訳本」の一冊となった（瀬田47）。[22]また同作品は、大衆の人気を得ただけでなく、出版界や教育界からも高い評価を得た。1949年（昭和24年）6月22日、児童文学者協会選択図書二十六冊の一冊に選抜され、[23]また日本図書館協会が「地方図書館、公民館及び学校図書館の図書選抜の参考に供するため」に選んだ第一回日本図書館協会選択図書目録にも含まれている。[24]

日本人読者の多くは、ワイルダーの開拓物語に励まされ、生きる力を見出した。例えば、1949年（昭和24年）3月9日、『日本読書新聞』は、「染み出るアメリカ市民精神のよさ―『長い冬』」という表題で次のような書評を行っている。

> きびしい寒気、吹雪の為に汽車が長い間不通になって、小さな開拓者の町は食料と燃料の危機にさらされる―これはいまから約七十年前アメリカのダコタ地方の開拓地で実際起こった話である。日常生活のいろいろな事実が…淡々とのべられ、しかもそれが読むものにあふれるような豊かさと大きな勇気を与えないではおかない。人間が本当に困難を乗り越え大きな幸福に到着するためには、目をそばだたしめるような英雄的行為よりも、ちょっとした正直、勤勉、工夫、勇気といった身近なものの方がどんなに大事であるかという伝統的なアメリカ市民精神のよさが示されている（2）。（傍線筆者）

また文芸雑誌『白象』は、『長い冬』について、以下のように評した。

> このすばらしき試みはロオラを彼女の十四歳の年にかえらして述べている。十歳の子供たちは読みながら一度ならず息をころして読み、年配の人はそれを読むと一つの推進力を与えられる。寒さ、食物の不足、交通の不便は勇気と敏腕とで当

らるべき問題である。本書は著者の開拓書の如き意味において元気を鼓舞するものである。[25]

この二例の日本人読者の感想において注目すべきは、どちらの例も作品に描かれた登場人物の苦労や不便、困難に日本人読者が「勇気」や「推進力」、「元気」を感じ取っている点である。これは、ワイルダーの開拓物語が、アメリカの過去にも日本のような苦境と困難と不便とがあり、そしてアメリカの人々がそれらの問題に「正直、勤勉、工夫、勇気」をもって真剣に取組み乗り越えてきた事実を日本人読者に強く印象付けたことを示している。1951年(昭和26年)11月1日、『日本読書新聞』が行ったアンケート、「わが家の本棚—家中みんなで読んだ本」に答えたある読者は、『草原の小さな家』について、「アメリカにも苦しく烈しい歴史がある事を知らせてくれます、興味をもって家中で読みました」(7) と熱心に語っている。この読者例が示すように、敗戦国・被占領国の日本人にとって、戦勝国アメリカは当時強さと豊かさの象徴であり、そのアメリカに日本が戦争で経験したような「苦しく烈しい歴史」があったことは衝撃であった。

その日本人の感じた衝撃は、『大きな森の小さなお家』の訳者、柴田徹士が同作品のあとがきに載せた言葉にも明確に示されている。

この本は、みなさん（児童）だけでなく、お父さんや、お母さん、兄さんや、姉さんがたにも、ぜひ読んでいただきたい本です。大変おもしろい上に、教えられる所がたくさんありますから。この本を読むと、アメリカという国が自分の思っていたのとまるでちがっているのに、びっくりされるはずです。

アメリカを、ぜいたくな国、のんきな国、と思っている人がたくさんあります。しかしその生活の底には、「開拓者の精神」というものが流れています。けものばかりの深い森を切り開いて、開墾地を作りながら、東部の大西洋の沿岸から、西へ、西へと、太平洋まで進んで行った人が、「開拓者」なんです。あらゆる苦しみと戦って、一歩もしりぞかない。でも、不自由の中でも、生活を楽しみ、宗教を重んじた、その「開拓者」の子孫が、この中のローラの一家なのです。独立独歩で、しかも、みんなの中にあふれています。この精神は、今でもアメリカに強く流れているのです。…読んでしまった時には、まるで、自分もその生活をして来たような気がするにちがいありません。そして、アメリカに対する理解を、ずっと、ずっと、深められるでしょう（180-181)。

柴田のこの言葉が示すように、敗戦国日本にとって、アメリカは憧れの対象であると同時に、また憎しみや嫌悪の対象でもあった。戦後かつて経験のない艱難にあった

日本人の眼には、アメリカは「ぜいたくな国、のんきな国」にも映った。そのアメリカが、日本人同様飢えや寒さ、不便さを経験してきたことは、まさに「アメリカという国が自分の思っていたのとまるでちがっているのに、びっくり」であった。1945年降伏宣言時の天皇の言葉、「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び」を貫いていた日本人にとって、西部文学が描く開拓者たちが一から手作りで立ち上げる生活の模様や困難の日々は、戦争で忍耐と努力を強いられてきた日本人読者にとって理解しやすく、また馴染み深い、「まるで、自分もその生活をして来たような気が」するものであった。

西部開拓者のフロンティア経験に自身の戦争経験を重ね合わせた日本人読者は、西部文学に驚きと同時に生きる力と日本の未来への希望を見出した。柴田の言葉にあるように、西部文学は、敗戦国日本も西部荒野の開拓者たちのように「あらゆる苦しみと戦って、一歩もしりぞか」ずに「不自由の中でも、生活を楽しみ、宗教を重んじ」ていればいつしかアメリカのような繁栄した民主国家になれる、という憧憬と期待の念を読者に喚起したのだ。

日本出版協会会長であった石井満も、西部文学に描かれた西部開拓者の生活に日本復興への希望を見出した一人である。[26] 石井は『仔鹿物語』に対する書評を、次のように述べた。

> 『小鹿物語』が目下天然色の映画となって都下の常設館に現れ、非常な好評で、日延上演されている。…（十九世紀）当時の農民は、井戸一つなく、水は泉まで何回かを汲みにゆく。草の種を買い、それを畑に播いてその収穫によって煉瓦とシックイを求めて井戸を掘るという生活である。…即ち開拓者の闘いが、今日アメリカ国民の幸福を作り上げ、彼等の夢が百年、二百年の後に実現されたのである。この意味においても敗戦後、焦土の上に再び民主的な平和国家を建設しようとしてあらゆる困難と戦っているわが国民にとっては絶好なる読物である。[27]

柴田同様、石井もまた西部フロンティアの生活を「闘い」と捉えた。石井は、開拓者が極めて不便な生活を送りながら、いつしか幸福を実現する様は、困窮にあった敗戦後の日本人にとって「絶好なる読物」であると考えた。なぜなら、開拓者たちの日々の「闘い」を「今日のアメリカ国民の幸福」の基盤と捉えた石井にとって、日本人の戦中戦後の闘いは将来国家の幸福を実現するための必要条件的な前提作業と映った。石井は『仔鹿物語』に日本の戦後の風景を重ね、この開拓物語をいわば日本の未来のサクセス・ストーリーとして創造的に読み変えたのだ。

更に重要なことは、前述の『日本読書新聞』が述べた「伝統的なアメリカ市民精神のよさ」、すなわち「正直、勤勉、工夫、勇気」といった精神が開拓者の成功の鍵と考えられた点である。なぜならこの精神は、日本人が伝統的に美徳とする忍耐、努力、

勤勉の儒教思想に通じる精神であるからだ。この例は、「英雄的行為」ではなく「ちょっとした正直、勤勉、工夫、勇気といった身近な」精神こそが人間を「困難を乗り越え大きな幸福に到着」させるものであるとしている。上記の訳者柴田徹士も読者に宛てたメッセージに同様のことを述べている。柴田は、西部フロンティアの開拓者であるローラたち一家には「開拓者精神」が溢れ、その精神とはすなわち「あらゆる苦しみと戦って、一歩もしりぞかない」、「独立独歩」であると理解している。つまり、ここに挙げた日本人たちは、ワイルダーの開拓物語を、勤勉・忍耐・努力の「頑張る」物語と、極めて日本文化的な解釈を行ったのだ。この時、開拓者精神はアメリカの「伝統的市民精神」でありながら、同時に読者の日本文化的視野によって、日本人に馴染み深く理解・実践可能な精神として受容され、いわば読者の間で日本に「土着化」されたと言える。そして柴田が、このアメリカ伝統的精神を理解する時「アメリカに対する理解を、ずっと、ずっと、深められる」と主張したように、日本人にとって馴染み深く「土着化」された開拓者精神は、アメリカを権力と憧憬の象徴としての国としながらも、日本が理解し且つ追随し得る「身近な」存在へと、日本人のアメリカ観を変容させたのだ。

この日本人読者の西部物語を自らの物語とする文化的視座は、読者の間にかつて国民の敵であったアメリカに対し、「共感」という新たな感情を生みだした。ある『長い冬』の読者は、戦後この文学作品に初めて出会った時の記憶を後にこう振り返る。

> 今にして思うと、『長い冬』が私を捉えたのは、あの不思議な安らぎだったと思うんです。手作りも家族も、あの次々に湧いてくる困難も、焼け跡族の私にしてみれば、身近に思える共感がありましたから。残り少ない食べ物を、みんなで分け合って美味しそうに食べる話なんかは、飢えを経験したものじゃないとわからないと思いますよ。最後にみんなが待ちに待った汽車が着いて、汽笛がわたるシーンがありますよね。あれは戦争という“長い冬”と重なって、私にも安らぎを与えてくれたものでした（服部 228-230）。[28]（傍線筆者）

この読者は、ローラたち一家の冬を、自らの「冬」、つまり戦争体験と捉えた。そして、終に春が訪れ一家が長い冬を乗り越える結末は、この読者にとっても「春」、つまり再生と幸福への新しい門出を思わせた。それは丁度、『長い冬』の訳者石田アヤが作品の中に見出した次の感情と同じ感情であった。

> （ローラ達の）大自然の恵みを十二分に生かした生活は子どもたちにもたやすく理解出来たし、親子、姉妹の関係、国民としての強い自覚や信仰、それに単純な生活の中の変化の楽しさや恐怖や心配などに、みんな一番強く惹かれてたわ。そ

れはちょうど、長い戦争の間に私達が味わった、命懸けの心配や緊張や努力や安心や喜びなどに通じていたからだと思うの（服部 227-228）。

石田のこの言葉が示すように、アメリカという異国且つ敵国の物語でありながら、日本人読者はフロンティアの開拓者たちに日本国民の戦時中の姿を重ね、また自国に「通じる」精神を読み取り共感することで「強く惹かれ」たのだ。

読者の西部開拓者への共感は、更に読者にある特別な安堵感を抱かせた。石田アヤは『長い冬』を翻訳していた当時を振り返り、次のように語った。

アメリカ憲法にうたってある、「生命、自由、幸福の追求」に対する人間の生まれながらの権利、自由、独立の精神が、苦しみの中にも開拓者たちに自尊心と満足と希望とを与えているのがこの素朴な物語にも力強くあらわれている。…そこ（西部）にはこの物語の中の一家のような人々もいて真のアメリカの建設に大きな力を尽くしたということを知るのは心を暖かくすることであり、深い尊敬を彼らによせることにもなる。…本当のアメリカの建設はこの時代の中西部の力と言える。ヨーロッパ文化のつづきではない、アメリカの土地から生れたものがここに育ったのであるから（石田 102-103）。（傍線筆者）

この石田の「心暖かく」なる経験は、興味深いことに、多くの日本人読者に共有された経験であった。英文学研究家壽岳しづは、1952 年（昭和 27 年）、キャザーの『私のアントニーア』について、「心あたたまる小説—W・キャザー著『私のアントニーア』」と題し次のように評した。

この『私のアントニーア』は、きっと誰にも愛せられるであろう。一行ごとにこめられたキャザーらしい真実さは読む人の心をまずあたため、すがすがしくさせ、そして楽しくさせるにちがいないから。…いつも人生の不滅なものを見つめているキャザーは、この作品の中においても、平凡な物事の中にひそむ深い意志を、実に素朴にしみじみと物語っている。私もまた深くこれを愛する。[29]（傍線筆者）

壽岳は、アントニーアのけして英雄的ではなく、むしろ「平凡」な開拓生活の中に描かれた作者キャザーの「深い意志」を読み取り、「私もまた深くこれを愛する」という「心あたたまる」経験をしている。

壽岳の『私のアントニーア』に感じた安心感は、アメリカ文学研究者西川正身にも感じられた。西川は『私のアントニーア』書評の中で「心あたたまる」想いを表現している。この作品が「暖かな人情ないしはヒューマニズムに貫かれた作品」である

とした西川は、「ひとは甘いというかも知れないが、この種の作品に接すると、ほのぼのと心の暖まる思いをしないではいられない」[30]（傍線筆者）と明言している。石田と壽岳、西川が共通して経験した「心あたたまる」感情は、彼ら日本人が敬い愛す精神を作品の主人公に見出し理解したことから来る共感である。勤勉・忍耐という精神をアントニーアと共有した彼らにとって、開拓物語は国と文化の違いを超越し、「ヒューマニズム」の物語として現出したのである。

この開拓者の「ヒューマニズム」を、児童文学者・翻訳者であった石井桃子は『仔鹿物語』の作者ローリングスに感じ取った。次の引用は石井がローリングスの他の作品について述べたものだが、『仔鹿物語』に対する彼女の想いがよく表されている。

> 日本の農村をあちこち歩きながら、ふいにある景色に出あってはっきり思い出すのが、ほかのどの本よりも『イヤリング』（『仔鹿物語』）で（ある）。…著者（石井）は、…土地に結び付き、喜びも苦しみもその土地と分かち合った人の記録から、今人間が忘れかけている自然へ帰ってゆきたい気持ちをゆすぶられる。その目をもっていれば、映画で並びあう隣人からよりも、自然から、貧しい農民の中に、より人間らしい人間を発見できることを教えられる。[31]

このように石井は、作品に描かれた貧しい農村の風景に「人間らしい人間」性を見出した。その「人間性」とは、石田アヤや壽岳、西川が共通して感じた、西部フロンティアに生きる開拓者たちの日々の忍耐と勤勉性である。アレグザンドラとアントニーアの、西部の大地への揺ぎ無い信念と尊敬に支えられた忍耐強い労働作業は、彼女たちの自己鍛錬の過程であり、彼女たちが最後に与えられるものは単なる物質的豊かさではなく、精神的豊かさと満足感である。強さと豊かさの象徴アメリカに、日本人の美徳・倫理観に共通する努力と勤勉、頑張りの精神があったことが、占領下の日本の状況では、読む者に共感と「心あたたまる」安心感を与えたのに違いない。同時に、西部文学の主人公を通して、頑張りの精神は幸福と豊かさの源泉として憧憬化され、また未来の幸福をもたらす鍵として読者に再認識された。敗戦後急激に進むアメリカ化により「精神的空白」状態に陥った日本人にとって、[32]これら西部文学が日本の伝統的な頑張り精神を肯定し称揚するかに見えたことは間接的な日本文化の肯定であり、読者に日本人としての自尊心の回復と安堵感をもたらしたのである。この時、日本人読者にとって「西部」とは、西部言説における自由・独立という要素よりも、忍耐・努力という日本文化的色彩をよりずっと色濃く帯びた空間となり、そしてアメリカ民主主義は、日本人にとって憧憬と羨望の対象でありながらも、全く無縁で新奇な思想ではなく、日本人に馴染み深い忍耐・努力の精神により達成可能な思想として理解されたのである。[33]

占領をめぐる思想教育と文学の政治学—GHQ/SCAP 日本民主化政策再考

上に述べた日本人読者の西部解釈は、日本占領史に重要な事実を突き付ける。GHQ/SCAP の日本「民主化」の意図と日本人読者の「民主主義」解釈との間には、明らかに齟齬があったという事実である。GHQ/SCAP が占領下日本に西部文学を通してアメリカ「独自」の西部開拓の歴史を教示し、植民地主義的意図を持ってアメリカが理想とする民主主義思想を日本に移植、再教育しようとしたのに対し、受け手である日本人読者は、アメリカ西部開拓の記憶・経験を「自らの」戦争経験として意味解釈し、開拓者精神をいわば日本に「土着化」させたのである。この時アメリカ国民は日本人が羨望し追従する「他者」ではなく、むしろ日本人が「共感」を感じ得る存在となり、戦後の日米間の政治的権力関係を揺るがすのである。

この日米間の意味解釈の齟齬は、日本人読者が単に西部文学を読み違えたことを意味するものではない。日本がアメリカの西部言説に初めて触れたのは、戦後の西部文学を通してではなかった。戦前の 1930 年代既に西部言説は日本に持ち込まれていたのだ。ターナーが提唱したフロンティア理論は、「アメリカ研究のパイオニア」と呼ばれる歴史研究者高木八尺によって日本に持ち込まれた。[34] 高木はアメリカ教育使節団に協力する日本側教育委員会の一人として、戦後日本の教育改革や憲法改正にも深く関わった人物である。[35] 高木は 1920 年代アメリカのハーヴァード大学でアメリカ史を学んだが、その師はターナーその人であった。高木は、ターナー教授は彼にとって「最初で最高のアメリカ史の教師」と称賛し、深い畏敬の念を抱いていた（Takagi xii)。高木が著したアメリカ史や日本の民主化に関する研究論文の多くは、恩師ターナーの思想的影響を反映している。彼はターナー同様、「アメリカ国民の性格と国力の発達を特色づけ我が国などと著しい対照を生ぜしめ」たのは西部フロンティアの存在であったと考えた。彼はフロンティアを、「一身と家族の生死を自己の双肩に荷う自主独住の独立人の社会」であったとし、その独立社会の人々は「当然に極めて民主的また平等であった」。そのため、彼は「真のアメリカのデモクラシーはここに涵養された」と考えた。更に高木は、フロンティアはアメリカの人々にとって「新生活の機会、更生の希望の根源」であり、また「あらゆる社会問題の安全弁」であったとし、西部フロンティアを「約束の地」とする西部言説を共有していた（高木 31-34)。[36] 高木にとって、先に例に挙げた石田満同様、戦後日本が新しく歩むべき道は、アメリカ西部開拓史の道のりに重なっていたのだ。

高木のみならず、ターナー理論に沿った西部解釈は他の日本人にも共有された。例えば、石田アヤは、1949 年、『長い冬』を翻訳しようとした動機を次のように語った。

> 終戦以来この物語を翻訳したいと（思っていた。）…多くの民主主義のお説教より、こんな生きたほんとうの話、ほんとうに民主主義の国を作った話を、こんなに興

味深く直接に子供達に投げかけた方がどれだけ教育的な効果が大きいかしれない（石田 103）。（傍点石田）

石田のこの言葉が示唆するように、彼女はワイルダーの開拓物語を「ほんとうに民主主義の国を作った話」という認識の下に翻訳を行った。このことは、「西部」と「民主主義」という二つの概念が、彼女の中で不可分に結び付いていたことを示す。この例から、戦後の日本には、西部開拓物語をアメリカ民主主義発展の物語と解釈する地盤が既に少なからず存在していたことが分かる。民主化に向かい始めた戦後日本において、この地盤を共有した読者たちは、西部荒野に焦土化した日本の風景を、そして開拓者たちの姿には日本人自らの姿を重ね合わせ、共感し、西部に新しい民主国家日本の未来像をより一層鮮明に読み取ったのだ。言い換えれば、日本人読者は、アメリカの伝統的西部言説という地盤の上に、自らの日本文化的視野から解釈した「西部」を接ぎ、アメリカの西部言説を日本の文化的枠組みにおいて再構築したのである。

日米間の民主主義の移植と受容の齟齬は、これまでの占領史において明らかにされてこなかった。なぜならGHQ/SCAP にとって、彼らが読書奨励を行った西部文学が日本人読者の間で人気となり好意的に受容されたことは、西部文学を通した日本人「啓蒙」政策が、彼らの期待通りに「成功」したかに映ったからである。日本人がアメリカ西部言説を日本文化的視点で読み変えたことは、おそらくGHQ/SCAP には見えなかったであろう。GHQ/SCAP による西部文学の導入と日本人の受け入れ—この日米間の表面的な能動と受動の関係が、戦後日本民主化とはGHQ/SCAP の「教育の成果」であったとする解釈を生み出した。この日本人の主体不在の偏った解釈は、マッカーサーを始め、GHQ/SCAP、更に多くの日米両国の歴史家たちによって今日まで通念的に共有されてきた。日米間の「西部」・「民主主義」の移植、受容の齟齬は、戦後日本の民主化がGHQ/SCAP 主体の思想教育の産物であったとする歴史解釈を、早急に見直す必要性を迫るのである。

同時に、この日米間の意味解釈の齟齬は、占領政策における思想教育と文学の複雑な政治学を提示する。GHQ/SCAP が利用した西部文学は、文学者David R. Shumway の言葉を借りれば、アメリカの日本占領政策を効率的・効果的に進めるためのいわば「ディシプリン」であった。Shumway は、「アメリカ文学」とはアメリカの繁栄と成功— “American civilization” —をアメリカの「国家的特徴」と定義付け、更にそれを国民に確信させるためのディシプリンであり、「アメリカ文学」とはナショナリズム及びナショナル・アイデンティティ形成に密接に結びついた概念的産物であるとした。Shumway は、アメリカ文学には「アメリカ文学」なる本質が存在するのではなく、何が「アメリカ文学」と呼ばれそのキャノンに選ばれるかは、時代や社会的状況に特有な、常に変動する知の生産過程である、と述べている。[37] この意味で、GHQ/SCAP

が占領下日本で読書奨励を行った西部文学は、まさにアメリカの理想的国家像、繁栄と成功の軌跡を日本人に確信させ、日本でアメリカ式民主主義という知の体系を移植する最良の材料だったのだ。

CIE入札制度で翻訳許可を与えられたアメリカ文学作品の多くが、1948年から1951年にかけて翻訳・出版されている事実も重要な意味を持つ。1948年は、占領研究においてGHQ/SCAPの政策転換期とされる時期である。当時表面化する冷戦構造は、アメリカの日本占領政策の性格をも変質させていく。Sakamoto Yoshikazuが述べるように、この政策転換期以降の占領軍の民主主義とは、占領開始当初の「民主主義」から、共産主義や労働組合主義者、平和運動家の排斥など、明らかに冷戦に腐食された「民主主義」へと変化した（65-66）。この時期、民主化政策で利用された映像資料などの教育材料もまた、保守的で国家主義的な傾向を強めていく。GHQ/SCAPの配布した教育用映画を研究したYuka Tsuchiyaは、1948年以降CIEによる映画教育政策が急激に拡大すると同時に、製作される映画内容がアメリカを英雄化・父権主義化し、統一国家、世界の主導者としてのアメリカというイメージを前景化する方向に転向した事実を挙げている（193-213）。これは、1948年以降のアメリカが、冷戦という政治的枠組における自国のイメージ及びナショナル・アイデンティティの再編過程にあったことを反映している。この映画教育政策の事例が示唆するように、1948年から開始された入札制度によって日本で次々に翻訳・出版された西部文学は、西部フロンティアを通して理想的アメリカ像の原点を日本に教示する教育的媒体物のみならず、西部言説に基づきナショナリズム色を強めた、ソ連に対抗する「アメリカ」としての自己イメージ、ナショナル・アイデンティティを再編する政治的ディシプリンでもあったのだ。[38]

しかし、アメリカのこの政治的ディシプリンは、日米間の文化的差異によって、その意味と効果を大きく変容されるに至った。アメリカが輸出・移植を図った植民地主義的・国家主義的・白人至上主義的イデオロギーを孕む西部フロンティア言説は、日本人読者の文化的視野により日本文化に取り込まれ、日本再興への希望の原石となり、また日本人のナショナル・アイデンティティ再構築の一つの布石となったのだ。このことは、GHQ/SCAPの日本占領政策が、単に戦勝国アメリカと敗戦国日本の間の支配と被支配、抑圧と抵抗の関係ではなく、二国間において相互的な文化接触や複雑な権力の方向性のある、複層的関係であったことを示す。そして占領政策における西部文学は、単なる文字としての思想教育材料ではなく、むしろ日本、アメリカそれぞれが自国・自文化の正当性、優位性と権力を求めた闘争の場であった。同時に、西部文学は、占領関係にあった日米両国を、政治的関係を越えて結び付ける新たな関係を構築し得る場でもあった。占領政策における文学こそ、戦後日本民主化を多面的に発展させた教育材料であったと言えるだろう。

注

本研究は科学科研費補助金（21720088）の助成を受けたものである。

[1] 現在までの占領研究では、この問題について詳細な研究が未だ成されていない。これは、日本の占領に関する先行研究が、占領政策の事実関係の調査—すなわちGHQ/SCAPの翻訳、検閲、出版政策の動向や翻訳・出版された外国本の種類など—を中心としてきたことが理由であろう。Mire Koikariは、日本の占領研究が、個々の占領政策方針内容や政策決定過程などの解明に研究の重点を置いてきたために、占領の具体的組織構造・方針などは明らかになってきたが、冷戦構造といったより広い視点からアメリカの日本占領を再批評する段階に至っていないという占領研究の欠点を指摘している。この点については、Koikari, *Pedagogy of Democracy : Feminism and the Cold War in the U. S. Occupation of Japan* (Philadelphia : Temple UP, 2008) 参照。同様に、越智博美も、"What Did She Read? : The Cultural Occupation of Post-War Japan and Translated Girls' Literature" (*Frontiers of Gender Studies* 5 (2006) : 359-363) の中で同様の問題を指摘している。越智は、GHQ/SCAPの日本再教育政策に関するこれまでの研究はGHQ/SCAP記録文書発掘が中心であり、先行研究の多くが占領軍が日本民主化政策に利用した文化財の分類化に帰結している問題を指摘している。日本の戦後民主化とアメリカ文学の関係を正確に把握するためには、GHQ/SCAPに使用された文学作品の中身、つまり作品の文学的意味を、占領政策の広い文脈から読み解く研究が必要である。

[2] この「本の贈り物」は、アメリカの前陸軍省教科書委員会（War Department Textbook Committee）が選抜した四百冊を、アメリカ教育使節団が戦後日本民主化に向けた新しい学校教科書作成のための参考教材として日本に寄贈したものである。前陸軍教科書委員会は、この「本の贈り物」は、「民主主義の理想の考え方を日本で促進するために、形式・体裁・中身・期待される効果全てが整っている本」であると明言した。(GHQ/SCAP, CIE, "Gift Books Will Be Used as Guides in Rewriting of Texts for Schools," *CIE Bulletin* 16 June 1947 : 2)。この「本の贈り物」は日本到着後、東京など都市部で一定期間展示された後、全国各地の学校図書館に配布された。アメリカ教育使節団の「本の贈り物」については、以下の研究に詳しい。中村百合子・三浦太郎 (2001)「占領期における教育使節団からの「本の贈り物」」『図書館文化史研究』18巻, 43-77頁、今まど子 (1996)「アメリカ教育使節団の贈物」『中央大学文学部社会学科紀要』6巻, 121-150頁 .

[3] GHQ/SCAP, CIE, *Education in the New Japan* (Tokyo : GHQ/SCAP, CIE, 1948) 384. CIE図書館は、1945年の東京第一館創設以降、各主要都市に二十二館設置された。

[4] GHQ/SCAP, CIE, "SCAP Announces Initial List of 100 Foreign Copyrighted Books Now Available for Publication in Japan," *CIE Bulletin* 26 May 1948 : 13.

[5] GHQ/SCAP, CIE, "SCAP Announces Initial List of 100 Foreign Copyrighted Books Now Available for Publication in Japan," *CIE Bulletin* 26 May 1948 : 13.

[6] 占領中日本で翻訳・出版された外国図書は入札によるものだけではない。1950年からは、GHQ/SCAPの認可を得た外国著作権の仲介業者が登場し、日本の出版社がこの業者と直接交渉によって翻訳権を取得する件数が急増した。1952年までに五千四百四十点以上の外国図書が仲介業者により翻訳出版権を与えられた（内三千二百点以上がアメリカ図書であった)。

[7] 戦後日本では、ジョセフ・グルー作『滞日十年』、マーガレット・ミッチェル作『風と共に去りぬ』など翻訳外国本がベスト・セラー上位を独占した。翻訳外国図書については、以下の研究に詳しい。宮田昇『翻訳権の戦後史』(東京：みすず書房 , 1999)、佐藤亮一『翻訳騒動記』(東京：政界往来社 , 1987)。

[8] アメリカの図書は、CIE翻訳許可制度が開始してから毎年千点から二千点以上あり、翻訳許可図書全体の11%から14%を占めた。アメリカの図書に続き、イギリス、フランス図書の人気が高かった。ソ連の図書はほとんど翻訳権を与えられなかった。詳しくは佐藤『翻訳騒動記』

を参照。

[9] GHQ/SCAP, CIE, "Foreign Copyrighted Books," *CIE Bulletin* 26 May 1948：14.

[10] この貴重な情報は、Laura Ingalls Wilder Historic Home and Museum の Darlys Winn 氏よりご提供頂いた。記して感謝申し上げます。

[11] アメリカ教育使節団は日本に「本の贈り物」を送るにあたり、ワイルダーの一連の開拓物語を、「アメリカの風景—過去（"American Scene—The Past"）」という分類に入れている。

[12] *The State Department Record* 1 July 1946. 谷川建司『アメリカ映画と占領政策』（京都：京都大学学術出版会，2002），178 頁より引用。出典は国務省国際映画部「映画を通じての合衆国の紹介」（1946 年 7 月 1 日付）を谷川氏が日本語訳したもの。谷川によれば、西部フロンティアを題材とした映画と言っても、『拳銃の町』のように、西部フロンティアを無法地帯を強く印象付ける作品は「海外での上映は勧められない」作品として区別されていた（292）。

[13] 日本占領に関わった教育使節団及び国務省の要人たちもまたターナー理論の影響を受けていたと考えられる。アメリカ教育使節団を構成していた二十七名は、イリノイ大学総長を務めた団長のジョージ・D・ストッダード博士を始め、ワシントン州立大学総長、カリフォルニア大学教育学部長、シカゴ大学教授、コロンビア大学教授など、大学教育の権威者たちであった。彼らのような学術・教育関係者たちがターナーのフロンティア理論に触れていた可能性は高い。また本文中の国務省による「開拓者精神がアメリカの性質とアイデンティティに多大なる影響を与えた」という記述からも明らかなように、アメリカ教育界のみならず、政府関係者の多くもまた、ターナーのフロンティア理論の影響を少なからず受けていたと推察できる。アメリカ教育使節団の研究は、土持ゲーリー法一『米国教育使節団の研究』（東京：玉川大学出版部，1991）に詳しい。

[14] GHQ/SCAP, CIE, "Book Bidding Results：Fifty-Three Japanese Publishers Awarded Translation Rights for 91 American and British Books," *CIE Bulletin* 23 June 1948：13. コスモポリタン社が三十万円の著作権使用料で競り落とした。落札時の当社予定印刷部数は四万部であった（「米英書の落札きまる」『日本読書新聞』昭和 23 年 6 月 23 日，1 頁）。

[15] この作品の題名 *The Yearling* は、『仔鹿物語』の他『イヤリング』とも訳される。現在まで両方の邦題があるが、この論文では、戦後日本で始めて翻訳・出版されたものが『仔鹿物語』であったことから、一貫してこの邦題を用いる。

[16] ワイルダー『草原の小さな家—少女とアメリカ・インディアン』（古川原訳）（東京：新教育事業協会，1950）.

[17] GHQ/SCAP は、日本の伝統的家制度の解体による女性の社会的地位向上を日本民主化政策における五大改革指令の一つとしていた。この GHQ/SCAP の方針を反映し、アメリカ教育使節団は「本の贈物」を選抜する際、作品の選抜基準の一つとして、「女子の参加を示す本を含む」ことを挙げている（中村・三浦 55）。考察する西部文学選抜には女性の社会参加を前景化し、男女平等社会を強調する GHQ/SCAP の意図が働いたのではないかと思われる。占領関係者が、日本民主化政策においてジェンダーの不均衡に注視していたことは、教育使節団団員選抜過程にも見受けられる。使節団団員の選抜に当たって、GHQ/SCAP 及びアメリカ国務省は、宗教的宗派や性別、人種などバランスの取れた構成にすることに注意を払った。国務省が最初に作成した団員名簿が公開されると、カトリック教育者・女性教育者・黒人教育者が含まれていないとの抗議の声が上がり、これを受けて国務省と GHQ/SCAP は慎重に再人選を行い改善を加えている。このことから、占領関係者が日本民主化政策において、ジェンダー・人種・宗教などの面について一つの支配的グループが独占しない民主的社会を強調しようとしたことが推察される。教育使節団団員の選抜については、土持『米国教育使節団の研究』第一章に詳しい。

[18] 「遅れた人々（backward peoples）」、「文明化」はマッカーサー自身が 1947 年 2 月に行ったスピーチからの引用である（Whan 183）。マッカーサーが自らの幼少時代を語った

次の言葉は、彼が西部開拓者と自分を同視していたことを示す―「西部の男なら誰でもそうであるように、私は銃の名手だった。読み書きができるようになる前には、そう、歩いたり話したりできるようになる前にはもう馬に乗り銃を撃つことを学んでいたのだ。」（"General Douglas MacArthur," ed. Wu Wei, 2000, 2 Mar. 2004 <http：//www.empereur.com/G._Douglas_MacArthur.html>）.

[19] この点は、GHQ/SCAP の占領に対する捉え方に明らかに現れている。マッカーサー自身日本占領に際し頻繁に強調していたのは、アメリカのアジア介入はヨーロッパの植民地主義的支配とは全く別物の「慈善的」行為であるということであった。彼は、また他多くの占領関係者も、アメリカの日本占領を「人道主義的」行為として捉えていた。マッカーサーは、日本の占領政策について、「占領の最も重要な意義は、日本人がかつて持ったことのない二つの偉大なる真価、すなわち民主主義とキリスト教を彼らにもたらすことである」とし、この「二つの偉大なる真価」は日本人の思考に「大改革を与える」ものであると述べている（Sakamoto 63）。彼にとって、占領軍の目的は、ヨーロッパ諸国がしてきたように日本を武力で植民地化し圧政下に置くことではなく、キリスト教の精神をもって日本人の再教育を行い、日本を古い封建的慣習から「解放」し、民主国家へと再生・復興させることであった。もちろん GHQ/SCAP の占領政策が冷戦構造や他様々な国際的政治状況を反映していたことは言うまでもないが、マッカーサーのこの占領に対する強い理想主義的使命感の下、GHQ/SCAP の占領政策は植民地主義的色彩を表面化に隠しながら、「教育的」、「人道的」行為として正当化されたのである。

占領におけるアメリカの日本「解放」の言説については、次の研究に詳しい。米山リサ（2003）「批判的フェミニズムの系譜からみる日本占領―日本人女性のメディア表象と「解放とリハビリ」の米国神話―」『思想』11 巻（2003）, 60-84 頁、Koikari, *Pedagogy of Democracy*、大津留（北川）千恵子、大芝亮『アメリカが語る民主主義―その普遍性・特異性・相互浸透性』（京都：ミネルヴァ書房 ,2000）、Ray A. Moore, "Comment：Reflections on the Occupation of Japan," *Journal of Asian Studies* 38. 4（Aug. 1979）：721-734. 米山リサは、GHQ/SCAP が占領期に日本人女性を「伝統的家父長制と軍国主義の犠牲者」と位置付け、アメリカによる占領が日本人女性に初めて「解放」をもたらしたという言説を創り出したことを鋭く指摘している。米山によれば、このアメリカの創り出した「日本人女性は犠牲者」というプロパガンダは、GHQ/SCAP の占領政策及び対日軍事政策が日本「治癒・更生」のための「良い戦争」であったと人々に記憶させ、アメリカの暴力の行使を正当化する「帝国神話」であった。

[20] 「翻訳文学繁昌記」『日本読書新聞』昭和 25 年 4 月 19 日 , 3 頁 . 戦後日本で大ベスト・セラーとなったアメリカの作品は、グルー『滞日十年』、ミッチェル『風と共に去りぬ』、メイラー『裸者と死者』、ハーシー『壁』、オルコット『若草物語』、ロレンス『チャタレイ夫人の恋人』などであった。

[21] 「"立読み"も出現―CIE 図書館一日千人の大入り」『日本読書新聞』昭和 25 年 2 月 22 日, 1 頁.

[22] 『長い冬』は第一巻・第二巻に分けられ出版されたが、1949 年 2 月の第一巻出版時の売り上げが好評だったために、同月内には第二版が出版された。『長い冬』は、戦後ベスト・セラーとなる『風と共に去りぬ』と共に「人気の翻訳本」リストに名を挙げている（「一般向けの翻訳図書」『日本読書新聞』昭和 24 年 11 月 2 日, 3 頁）。

[23] 「児童文学者協会選択図書」『日本読書新聞』昭和 24 年 6 月 15 日, 2 頁.

[24] 「日本図書館協会選択図書目録第一回」『日本読書新聞』昭和 24 年 4 月 27 日, 2 頁.

[25] 「入札されたる外国児童図書」『白象』1949 年, 243 頁.

[26] 日本出版協会は、CIE の監督の下、占領期日本における翻訳許可外国図書の翻訳・出版全般を統括した。

[27] 石井満「小鹿物語雑感」『日本読書新聞』昭和 24 年 11 月 2 日, 3 頁.

[28] この資料は、著者服部氏が個人的に行ったインタビューの記録である。引用許可を下さっ

た服部氏に記して感謝申し上げます。次脚注の読者の引用も同様。

[29] 壽岳しづ「心あたたまる小説―W・キャザー著『私のアントニーア』」『日本読書新聞』昭和27年1月23日，3頁.

[30] 西川正身「現代のアメリカ文学」『日本読書新聞』昭和27年3月5日，2頁.

[31] 石井桃子「ちえと詩に溢れた作品―M・K・ローリングス『水郷物語』村上啓夫訳」『日本読書新聞』昭和26年12月12日，3頁.

[32] 1955年のスピーチの中で、マッカーサーは次のように述べた。「日本軍の敗退は日本の自己信頼のみならず自尊心をも崩壊させた。宗教的崩壊は一層悪い状況であった。…この物質的、社会的、精神的空白の最中、占領が開始したのだ。」Lawrence S. Wittener, ed, "Render unto God That Which Is His," *MacArthur* (Englewood Cliffs, NJ：Prentice-Hall, 1971) 60より転用。この著作権付資料の転用には、General Douglas MacArthur Foundationの Colonel William J. Davis氏より転用許可を頂いた。ここに記して謝辞を申し上げます。

[33] 日本人女性読者にとっては、男性に比較し、西部フロンティアは自由・独立の象徴的空間としてより強く認識され、強い憧憬と羨望の対象であったかもしれない。それは本論文前半で述べたように、西部文学に登場する主人公女性たちが、「男性的」要素を備え、開拓者精神を体現する成功した開拓者だからである。封建的家庭制度下にあった日本人女性にとって、アメリカの女性開拓者たちが、男性とは異なる役割を遂行しながらも、相互依存的で一見対等な関係にあり、家庭内における地位を保持している姿は、「民主主義」という新たな男女関係に映った。その「民主的」男女関係は、家父長的家庭制度に抑圧されていた日本人女性にとって既に急進的であった。事実、戦後日本人女性の多くが、アメリカの女性を新しい時代のジェンダー・モデルとする傾向にあった。従って、日本人の西部解釈については、ジェンダーの差異による違いがあったことも考え得る。また考察する西部文学の女性表象と日本人読者の受容について更に深く考察を加える必要性がある。今後の研究課題としたい。

[34] 西部文学もまた戦後初めて日本で翻訳出版されたわけではない。『仔鹿物語』は戦前1939年に初版が出版されている。

[35] 高木は、戦後日本の再興と民主化に重要な役割を果たした人物である。彼はマッカーサーに明治憲法の英訳を与えるなど日本の伝統について進言し、日米国間の橋渡し役を務めた。彼はアメリカの民主主義理念に沿った日本の民主化を強く推し進めたが、日本の伝統文化廃絶を進めたわけではない。彼は、アメリカの民主主義理念の上に日本の伝統が接木されることが、日本再生と近代化にとって重要であると一貫して主張した。彼は、アメリカの民主主義理念を日本に適応・同化させることが日本再興への必要条件と考えていたのである。詳細は Takagi, *Toward International Understanding* 参照。

[36] 高木のみならず、他の日本人歴史家の中にも西部フロンティアとアメリカ民主主義の繋がりは広く知られていた。一例として、日高只一『アメリカ精神』（東京：千葉商事，1947）、阿部行蔵『アメリカ精神の形成』（東京：文化書院，1947）を参照。

[37] Shumwayの言う「アメリカ文学」生成過程において、西部フロンティアは常に不可欠な構成要素であった。例えば、アメリカ文学史の礎を築いたNorman Foersterは、1925年、「アメリカ文学」はどの意味において「アメリカ」足りえるかという問いに対し、ピューリタニズム、ロマン主義、リアリズム、フロンティア精神を「アメリカ」の四大要素と挙げながら、中でも全くヨーロッパに存在しないが故に「フロンティア精神」が最重要要素であると述べた（Shumway 136)。Foersterに続き、文学者Jay B. Hubbellもまた、フロンティアをアメリカ文学に影響を与えた最も重要な要素と位置付けている。彼は、「(フロンティア）はアメリカの作家達に新しい視点を与えてくれた。その新しい視点こそが我々がアメリカ的と呼べる要素である」と明言している（Jay B. Hubbell, "The Frontier," *The Reinterpretation of American Literature：Some Contributions toward the Understanding of Its Historical Development* (NY：Russell & Russell, 1959) 44)。

[38] この主張は、宮本陽一郎「「アメリカ」を輸出する国アメリカ－冷戦とアメリカ研究の成立－」『アメリカの文明と自画像』巽孝之編『シリーズ・アメリカ研究の越境 1』（京都：ミネルヴァ書房，2006）151-175 頁における「輸出可能な」アメリカの構築という議論に負う所大である。以下の研究も有益である。Lary May, "Made for Export：Hollywood and the Creation of Cold War Americanism, 1940-1958," *Empire：American Studies*, eds. John G. Blair and Reinhold Wagnleitner（Tübingen：Gunter Narr Verlag, 1997）91-121、Shumway, *Creating American Civilization.*

引用文献

Abate, Michelle Ann. "Becoming a 'Red-Blooded' American: White Tomboyism and American Indian Tribalism in *Caddie Woodlawn.*" *Mosaic* 41.4（2008）：143-159.

ブリンク、キャロル・ライリー『風の子キャディ』榎林哲訳 東京：講談社，1964.

Carden, Mary Paniccia. "Creative Fertility and the National Romance in Willa Cather's *O Pioneers!* and *My Ántonia.*" *Modern Fiction Studies* 45.2（1999）：275-302.

General Headquarters, Supreme Commander for the Allied Powers, Civil Information and Education Section. *Education in the New Japan.* Tokyo：GHQ/SCAP, CIE, 1948.

———. *CIE Bulletin.* June 1947-June 1948.

服部奈美『『大草原の小さな家』の旅』東京：晶文社，1995.

石田アヤ（1949）「ローラ・I・ワイルダー夫人の開拓時代の物語」『ワールド・リスナー』3 巻，98-119 頁.

Missouri Secretary of State. "A Missourian's Books Used in Japan." *Official Manual of the State of Missouri 1949-1950.* Missouri：The Secretary of State, 1950.

中村百合子・三浦太郎（2001）「占領期における教育使節団からの「本の贈り物」」『図書館文化史研究』18 巻，43-77 頁.

『日本読書新聞』昭和 23 年 6 月～昭和 27 年 3 月.

「入札されたる外国児童図書」『白象』1949 年，243 頁.

Sakamoto, Yoshikazu. "The International Context of the Occupation of Japan." *Democratizing Japan: The Allied Occupation.* Eds. Robert E. Ward and Sakamoto Yoshikazu. Honolulu：U of Hawaii P, 1987. 42-75.

佐藤亮一『翻訳騒動記』東京：政界往来社，1987.

瀬田貞二『英米児童文学史』東京：研究社，1979.

Shumway, David R. *Creating American Civilization: A Genealogy of American Literature as an Academic Discipline.* Minneapolis：U of Minnesota P, 1994.

高木八尺『アメリカ』東京：明善書房，1948.

———. *Toward International Understanding Enlarged Edition.* Ed. American Studies Center. Tokyo：U of Tokyo P, 1971.

谷川建司『アメリカ映画と占領政策』京都：京都大学学術出版会，2002.

Tsuchiya, Yuka. "Imagined America in Occupied Japan: (Re-) Educational Films Shown by the U.S. Occupation Forces to the Japanese, 1948-1952." *Japanese Journal of American Studies* 13 (2002)：193-210.

Whan, Vorin E. *A Soldier Speaks*：*Public Papers and Speeches of General of the Army Douglas MacArthur.* NY：Frederick A. Praeger Publishers, 1965.

ワイルダー、ローラ・インガルス『大きな森の小さなお家』柴田徹士訳 東京：文祥堂，1950.

———.『草原の小さな家—少女とアメリカ・インディアン』古川原訳 東京：新教育事業協会，1950.

Wittener, Lawrence S., ed. "Render unto God That Which Is His." *MacArthur*. Englewood Cliffs, NJ：Prentice-Hall, 1971. 60-62.

* 新聞記事及びGHQ/SCAP文書からの引用に関する出典については、出典情報頻出による文章の煩雑化を避けるため、文末に記載せず注内に記載した。